ITP –EUROPA 派遣報告書

近藤野里 (パリ第 8 大学派遣)
派遣機関：2013 年 3 月 12 日～2014 年 1 月 15 日

1. 派遣の概要

報告者は 2013 年 3 月 12 日から 2014 年 1 月 15 日までの約 10 か月間、パリ第 8 大学博士後期課程（フランス）において，博士論文に関する調査・研究を行った．なお、派遣先であるパリ第 8 大学では、同学の Joaquim Brandão de Carvalho 教授（音韻論）に指導教員をご担当いただいた。

研究テーマ

博士論文では 17 世紀末から 18 世紀初頭において、リエゾンがどのような統語的コンテクストで実現されていたかについて、当時の文法家による発音に関する記述をもとに調査を行う。16 世紀から 18 世紀という時代は、フランス語の文法規範が整備され、確立された時代であり、この頃に発音の規範も確立されたといえる。本研究では、語末子音の脱落が 17 世紀から 18 世紀にかけてどの程度進行していたのかを考慮に入れ、現代フランス語に見られるようなリエゾンの義務的、選択的コンテクストの区別がどのように存在していたのか、という疑問に答えることを試みる。当時の発音を示すために綴り字の表記に工夫がされたもの（Milleran 1692）、そして発音記号を用いて書かれた文献（Vaudelin 1713, 1715）を分析する。同時に当時の文法家によるフランス語の発音に関する記述を調査することで、リエゾンの義務的・選択的コンテクストの区別に関して、統語・形態的要因の影響について調査を行う。

派遣中の目標

今回の派遣における目標を以下に挙げる。まず、16 世紀から 18 世紀の文法家が提示した語末子音に関する記述に関する一次資料の調査をフランス国立図書館で行うことである。次に 17 世紀末、18 世紀初頭のフランス語の発音を記述した 2 つの文献 Milleran (1692)および Vaudelin (1713, 1715)のコーパス化を行い、分析を行うことである。これらを行うことで、博士論文の執筆を進める。そして、パリ第 8 大学での論文指導教官の Brandão de Carvalho 教授による指導を受けることである。これらの目標を達成することで、博士論文の完成を目指す。

2. 活動概要

派遣先での主な活動は、大学院でのゼミへの参加，図書館での資料収集，指導教員との

面談、論文執筆作業であった。

<u>ゼミへの参加</u>

パリ第 8 大学の言語学博士課程のラボでは、言語学を研究する学生全体のゼミが月に 2 回開かれている。このゼミでは、言語学における一つの分野に限らず、あらゆる分野の研究発表が博士課程の学生によって行われる。毎回、担当者 2 人が発表を用意し、その発表に関して意見交換を行うといった趣旨である。報告者も 2013 年 12 月のフランス語通時言語学国際学会に向けての発表練習をこのゼミで行った。

報告者が所属するラボでは、月に 2 回音韻論研究会を開催している。この研究会では、音韻論の研究者を招待し、研究報告を行っている。対象言語も様々で、フランス語以外の言語の音韻研究や最先端の理論を使用した研究を聞けたことは良い刺激となった。基本的には研究者の発表であるが、博士課程の学生が発表することもあった。報告者も「*A quoi ressemble-t-elle, la liaison du XVIIIème siècle ?*（18 世紀のリエゾンはどのようなものか？）」という題で、Giles Vaudelin (1713, 1715)のコーパスの分析について発表した。

<u>指導教員との面談</u>

指導教員である Brandão de Carvalho 教授との面談は 10 か月間で 4 回程度行われた。面談の内容は、次節の「派遣の成果」で詳細に述べる。

3. 派遣の成果

(1) 博士論文

今回の派遣では、先行研究の要約についての章および Vaudelin (1713, 1715)のコーパスの分析についての章を執筆した。また、Milleran (1692)のコーパス化を集中的に行い、データ処理を開始することができた。16 世紀から 19 世紀の文法家が提示した語末子音に関する記述が書かれた一次資料の調査をフランス国立図書館で行った。

(2) 指導教員との面談

今回の派遣中に行われた面談では、パリ第 8 大学に提出する博論のテーマについての話し合いが主な内容であった。6 月に行われた面談では、以前から興味があったフランス語の中舌母音の分布の通時的変化について話し合い、研究テーマの決定ができた。パリ第 8 大学に提出する博士論文題目は *Variations sociolinguistiques dans le système vocalique du français parlé – Étude sur un corpus des films des années 1930.*（「フランス語話し言葉における母音体系の社会言語学的変異　－1930 年代フランス映画コーパスを用いて」）に決定した。また、派遣期間の終了直前には、今後やるべきことの確認などを Brandão de Carvalho 教授と話し合うことができた。

(3) 論文投稿および研究発表

今回の派遣中に論文 1 本を投稿、そして研究発表を 3 回行うことができた。以下に詳細を記す。

論文：

2013 年 11 月末に本学のフランス語研究室論集 FLAMBEAU に「19 世紀末フランス語の母音体系―Paul Passy (1889)によるフランス語記述を基に―」を論文として投稿した。

学会発表：

学会発表をすることで、分析の方法や今後どのような調査方法を取るべきかというコメントを得ることができた。

(a) 2013 年 12 月 5 日：Journées PFC 2013 (Phonologie du Français Contemporain、現代フランス語音韻論)での研究発表（国際学生都市ノルウェー館、パリ）。
発表題目：「Loi de position et longueur de voyelles à la fin du XIXe siècle - Analyse basée sur le français décrit par Paul Passy（位置の法則と 19 世紀末の長母音、ポール＝パッシーによるフランス語を基にした分析）」

(b) 2013 年 12 月 18 日: 所属するラボが主催する博士課程学生の研究発表会 (Journée des doctorants)での研究発表（パリ第 8 大学、サンドニ）。
発表題目：「Le langage oral en diachronie : état des lieux du système vocalique du français à la fin du XIXe siècle （通時における話し言葉、19 世紀末のフランス語母音体系の確認）」

(c) 2014 年 1 月 6 日-8 日：フランス語通時言語学国際学会 (SIDF, Société Internationale de Diachronie du Français)での研究発表（ケンブリッジ大学、イギリス）。
発表題目：「La liaison dans le français parlé du XIXe siècle -Analyse basée sur *Le Français Parlé* (1889) de Paul Passy （19 世紀末のフランス語におけるリエゾン、Paul Passy による *Le Français Parlé* (1889) に基づいた分析）」

4. 今後の課題

今後の課題は博士論文執筆を 2014 年度中に終わらせることである。そのためには、Milleran (1692)のコーパスのデータ処理および分析を早急に終わらせること、そして文法書の調査を完了させることが具体的な課題となるだろう。